6.4 現況再現解析

6.4.1 地下水位および水収支

現況再現解析は、前述の条件(境界条件・降雨条件等)を入力し行った。

初期地下水条件は、「平均降雨量、漏水考慮せず」とした。現況再現計算は、モデルの地下水位(計算 算上は、得られたダルシー流速を有効間隙率で割った値として与えられる。 値)と現地盤の地下水位が合うまで(同定)繰り返し計算した。

地下水位の同定箇所は、神栖町が管理している神栖町役場・神栖一中・高浜・中央図書館の4箇所およ び企業局揚水井戸 10 箇所に加え、A 井戸付近と B 地区付近とした。

図 6.4.1 に降雨条件と地下水位同定結果を、図 6.4.2 に企業局揚水井戸地下水位同定結果を、図 6.4.3~ 図 6.4.6 に三次元非定常解析結果地下水面図を示す。

再現の結果、地下水は神ノ池付近を地下水位の頂上として、AB トラックでは大局的に東から西(A か ら B) 方向に向かう流れとなった。また、地下水位が低い時期ほど、A から B に向かう流れが卓越し、降 雨により地下水位が上昇すると、北東から南西に向かう流れとなる。

また、企業局揚水井戸の稼動状況の影響で、揚水井戸近傍では稼動時期により地下水の流れが変わるこ とが分かった。

さらに、平成 16 年 10 月に過去 10 年でも最高の降雨量を記録したことにより、地下水位は急激に上昇 し、11 月以降、これまでとは異なる AB 間中央付近を尾根とする地下水の流れに変わった。

これは、現地測定結果から描かれる地下水コンターとも一致した。

図 6.4.7 に、シミュレーションにおける水収支を示した。

図 6.4.7 に示す様に、流入に関して、非灌漑期においては降雨および地下水流入が主なものとなっており、 降雨が多い時期では降雨量が卓越し、降雨量が少ないと地下水流入が卓越する。灌漑期においては水田漏 水が50~80%程度になる。

流出に関しては、そのほとんどが地下水流出(54~76%)となっており、企業局揚水および民家揚水は それぞれ 10% 弱程度である。

6.4.2 AB 間の流向流速

図 6.4.8 にシミュレーション結果における AB トラックの地下水流速ベクトル図を示す。

地下水の流向および流速は、時期および深度によっても異なるが、AB トラックの平均的地下水状態と 考えられる 2004 年 8 月と、10 年確率以上の降雨が降った後の 2004 年 11 月の深度 10mと深度 30mを比 較した。

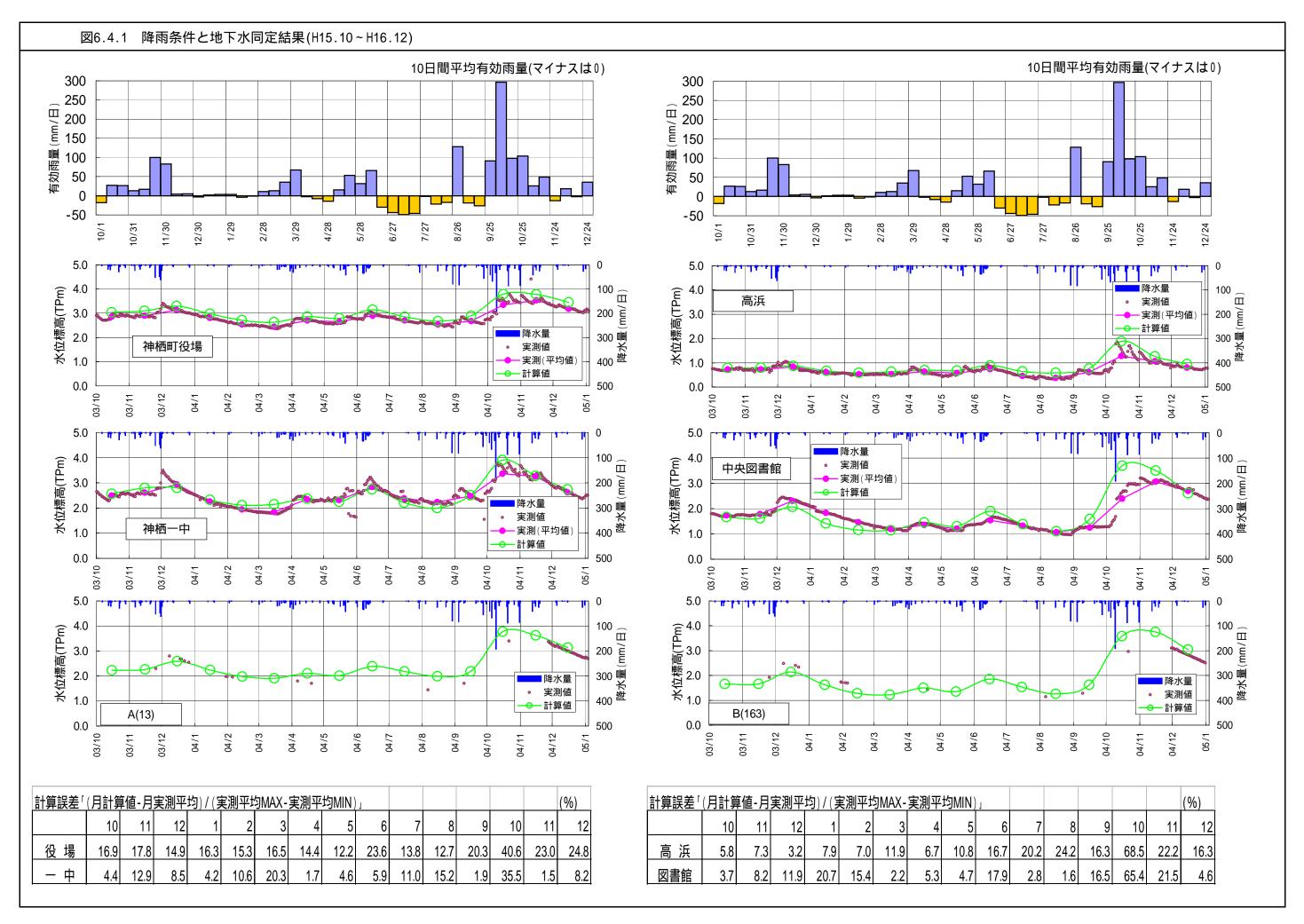
地下水の流速は「透水係数×動水勾配」で示され、この地下水シミュレーションで示される流速は地層 中の平均的な流速(ダルシー流速)と呼ばれる。

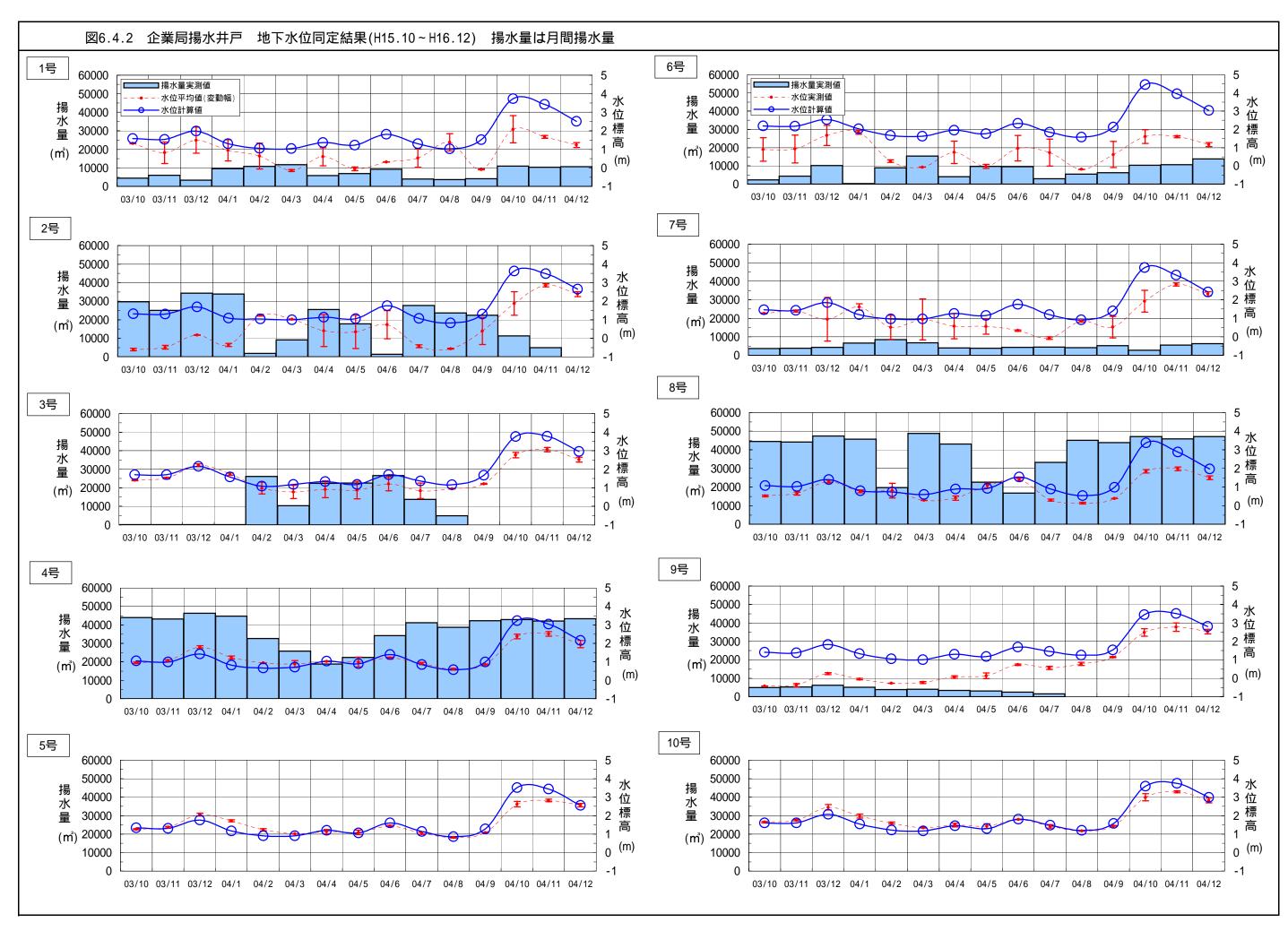
2004 年 8 月では、地下水の流向は、深度 10mおよび 30mとも、ほぼ A から B に向かう。流速は地層 (透水係数)によって支配されるが、深度 10mでは 0.01~0.05m/day 程度となり、深度 30mでは 0.08 ~ 0.3m/day となる。

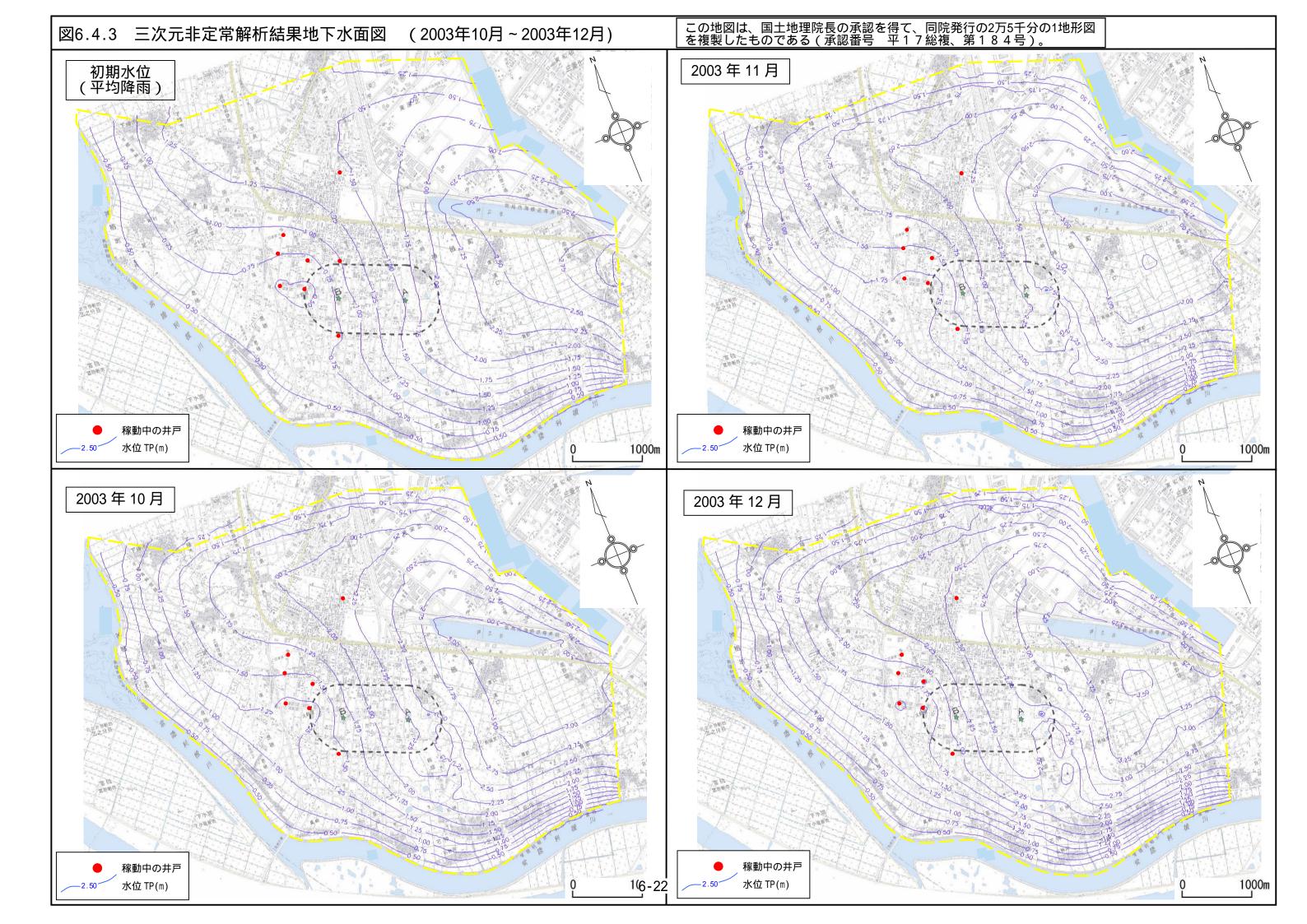
2004 年 11 月では、地下水の流向は、AB 間中央付近を境に、A 井戸側では西から東あるいは北西から 南東に、B地区側では北東から南西に向かう流れとなる。流速は、深度10mでAB間中央付近で0.002m/day 程度、A 井戸および B 地区付近で 0.01~0.05m/day 程度となる。深度 30mでは、AB 間中央付近で 0.005m/day 程度、A 井戸および B 地区付近で 0.1 ~ 0.3m/day 程度となる。

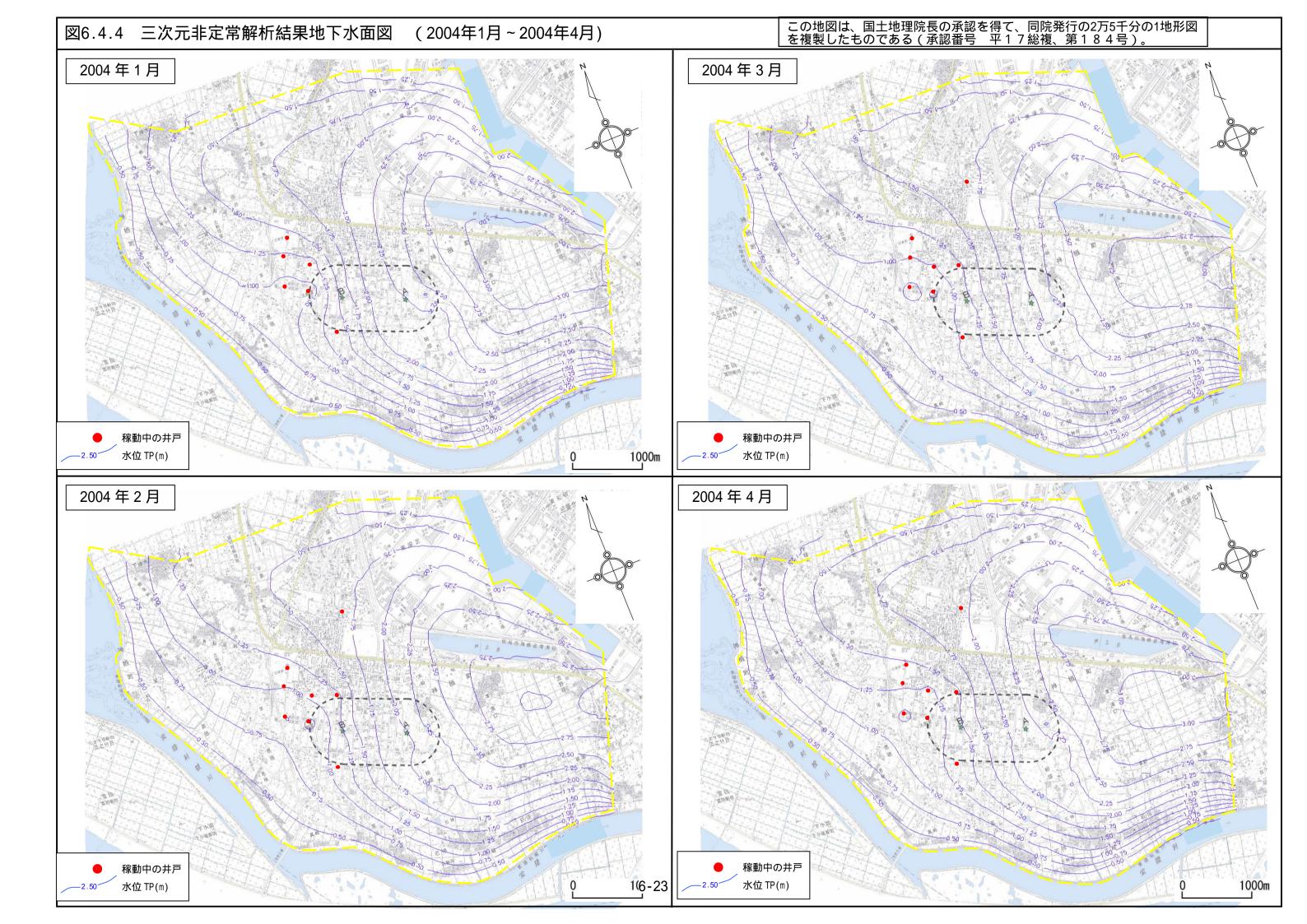
また、これを汚染物質の挙動として考えると、汚染物質は地層内の間隙を通って移動していくため、計

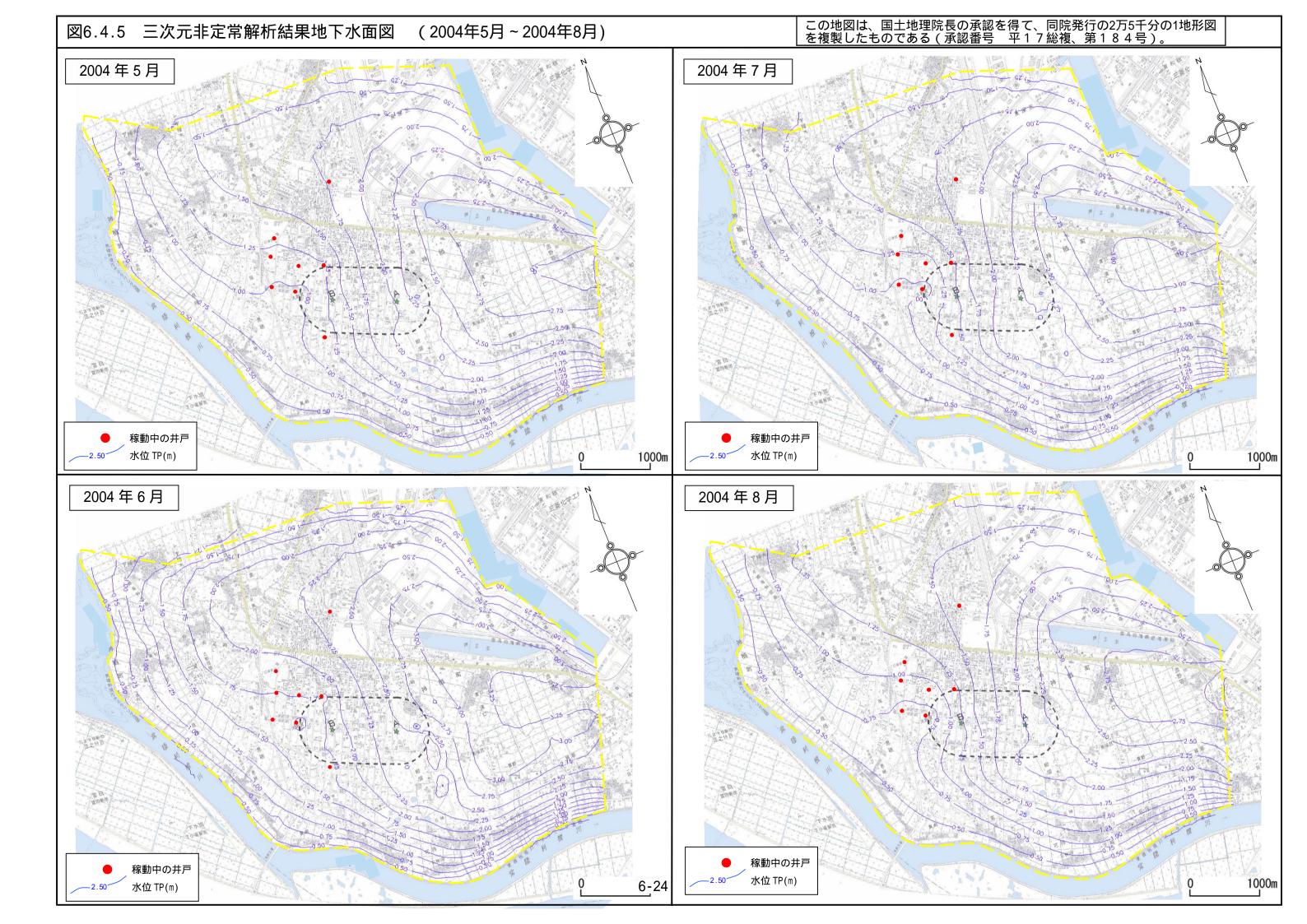
この実流速に基づく汚染物質の移動速度については、後述の7.地下水汚染シミュレーションに示した。

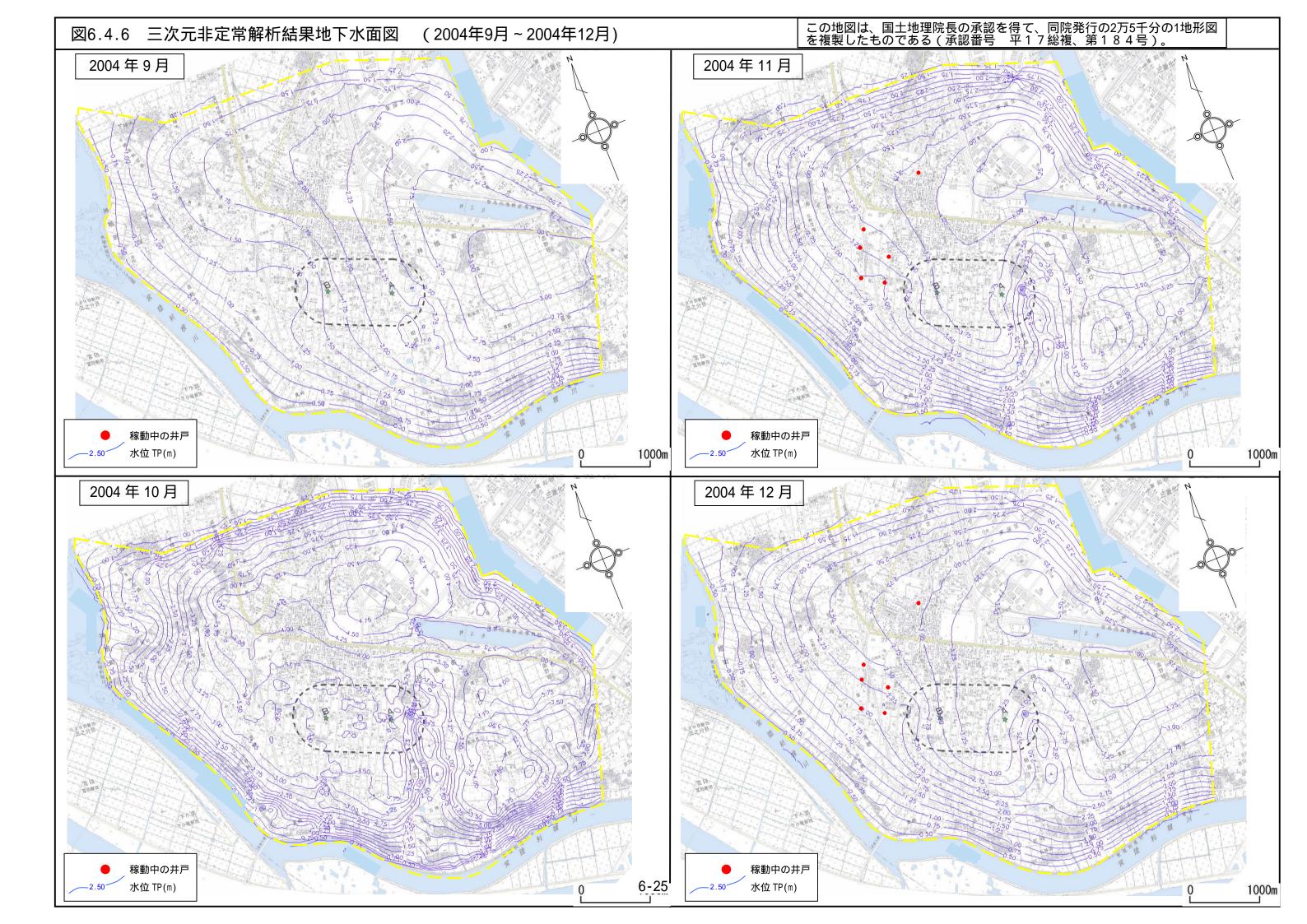












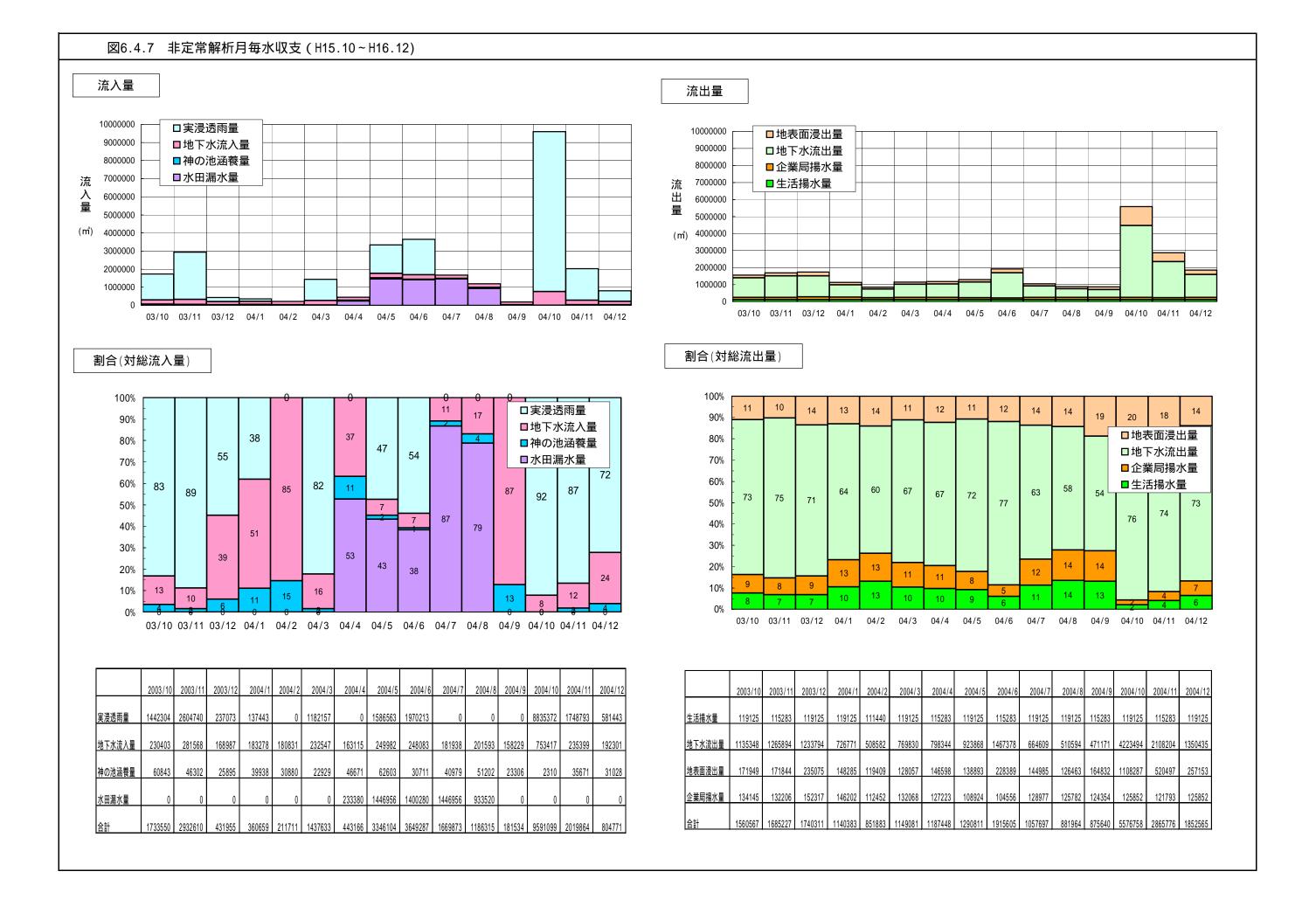


図6.4.8 ABトラック内流向流速ベクトル図(流速はダルシー流速)

